

評価結果一覧

1 作品収集・保存事業の評価 【評点5】 ＜過去から現在に至る写真・映像文化を未来に継承する美術館＞

(1) 優れた写真・映像作品の計画的・効果的な収集 【評点5】

＜評価の理由＞

- 収集内容は「黎明期の写真」等の歴史資料的なものから先鋭的なものまでバラエティに富み、生き生きとした感じがする。収集委員会のメンバーが多様でいい。
- 376点の収集、寄贈（177点）によりコレクションの充実が図られている。特に、新規重点作家の作品を複数購入している点は、収集方針に沿った目標達成といえる。また、過去3回実施した映像祭出品作品からの購入は、美術館で実施する映像祭の実施意義を補強するものとして評価する。
- 収集予算が削られる状況下で、独自の収集手法の開拓により写真史上貴重な作品を自前の財団予算で購入、都に寄贈することを可能としている点を評価する。
- 安井仲治、北井一夫、須田一政、畠山直哉の各氏の作品がまとまって購入された点、藤幡正樹氏や山城知佳子氏らの代表作と呼べる作品を購入されている点を評価する。
- 基本方針および収集指針が明確に立てられており、これに基づく収集が適切に行われている。とりわけ、「写真作品」に限定せず、「写真資料」および「写真機材類」を視野に入れている点を高く評価する。
- 意欲的かつ均衡のとれた収集活動が行われ、購入および寄贈点数の目標数200点を大きく上回る376点にのぼった。新収集作品もプリントスタディールームを設置して、鑑賞、閲覧が可能となっていることは適切な措置である。

＜指摘された課題・提言等＞

- 次の「新規重点作家」をいつどのように選ぶのか、時期的な見通しは立っているのか。コレクション形成の根幹中の根幹であるから、時間をかけて慎重に選定してほしい。
- 写真美術館は「写真・美術」を館名に示しているが故に、写真を美術作品として限定的に捉えがち。このことを常に自覚し、広く写真文化を捉えてほしい。
- 美術館で絵の具やキャンバスを集めているかということ、そうではない。作品だけがどこにあるかということ念頭に置きながら、いつも視野に入れていくことは必要。

写真機材類の収集について、どのように具体的に行動を起し、コレクションするかということは、それぞれの性格によるので一概に決められないが、少なくとも日本カメラ博物館との間の連携関係をいつも念頭に置いてほしい。

(2) 的確な作品管理 【評点5】

《評価の理由》

- 大学、民間との連携により保存科学研究所の活動を通して、作品の保存研究や、展示・保存環境の整備を恒常的に実施している。
- 千葉大学との共同研究の内容は、重要な意味があると思う。作品管理だけでなく、積極的に写真文化の継承に尽力している。
- 目標水準を高く設定し、的確に作品管理がなされている。とりわけ、温湿度のきめ細かいチェックと管理は、他の多くの美術館よりもはるかに優れている。
- 一般からの問い合わせが東日本大震災を機に増加している。今後は、写真管理に関する啓蒙・啓発活動を積極的に行うことが当館の社会的使命ではないかと考える。また、作品管理のための現実的な問題として、収蔵スペースの拡張を避けては通れない。

《指摘された課題・提言等》

- 収集・保存および調査・研究を巡っては、写真だけでなく映像資料についても、必要な活動を行う旨方針が定められているが、本年度も映像資料に関する十分な成果をあげることができていない。この方針のあり方について、改訂を含めて今後において抜本的な検討が必要なのではないか。
- 現在の状況における担当者の努力には信頼を置くが、すべてが充分ということはありません。震災の教訓等調査の上、増改築に反映して欲しい。
- 担当職員の人員数が1人となっている。人員が足りない。
- 今後、作品の保存の大切さを一層訴えながら、また保存が悪いとどうなるかなど、研究成果も見せながら進められたい。
- 東日本大震災の際に、実際の作品の修復をどうしたらいいかということに当惑しているということがあり、写真美術館のように経験を積んだ館に主導的な立場に立っていただきたいという希望は強く持っているのではないかと。

(3) 写真・映像に関する幅広い調査・研究 【評点4】

《評価の理由》

- 学芸員の研究、社会的活動が目覚ましく、成長点を感じる。外部の賞の受賞者が複数いることも、この美術館の活動が注目されていることを示している。今後もこうあって欲しい。
- 多岐にわたりそれぞれ目のつけどころがとても良い。各学芸員の方々がのびのびと楽しく仕事をしているのが感じられる。
- 展覧会や収集のための調査にどの程度の予算や時間が割かれているのかは不明だが、展覧会の構成、図録や紀要への執筆や講義など、調査の成果が見られる。

- 外部の兼職（大学等での講義や学会発表、委員等）の公開は、学芸員の調査・研究意識や相互理解を高めるにも有効であり、専門職の知見を社会還元する必然性も明らかになると思う。千葉大学との共同研究を評価する。
- 長年の研究に基づく「芸術写真の精華」を評価する。一方で、日常業務に追われ、十分に調査・研究が尽くされないケースもあるのではないかと懸念する。
- 前年度に比べると、調査研究・普及活動の成果の提示方法が改善されたことは評価できるが、それぞれの活動の質はまた別に評価されねばならない。美術館の学芸員の研究成果は何よりもまず展覧会の実現によって示される。展覧会が個人的な研究にどの程度裏打ちされているかを探る指標が必要になる。図録に掲載される論文はそのひとつであり、さらに展覧会の構成や作品解説なども評価の対象になりうる。多岐にわたる展覧会準備の中で、笠原美智子氏が美連協カタログ論文賞を受賞されたことは喜ばしい。こうした研究成果をさらに発揮できる職場環境を築いていただきたい。
- 「知られざる日本写真開拓史」展のために数年にわたって全国展開した調査研究は有意義であり、かつ各地の博物館・資料館との連携もさらに発展しうる可能性を持つ。この研究成果が年報に十分に示されていないのは残念。この調査研究活動は今後もぜひ継続、発展させるべき。

《指摘された課題・提言等》

- 収集・保存および調査・研究を巡っては、写真のみならず、映像資料についても、必要な活動を行う旨、方針が定められているが、本年度も映像資料に関する十分な成果をあげていない。方針のあり方等について、改訂を含め今後において抜本的な検討が必要なのでは。
- 各地の博物館・資料館との連携もさらに発展し得る可能性を持つ。この研究成果が年報に十分示されていないのは残念。年報にその辺についても記述されるよう望む。

2 展覧会企画の評価 【評点4】

＜質の高い写真・映像文化と出会う美術館＞

(1) 来館者数の目標達成と集客増 【評点5】

《評価の理由》

- 22年度も38万人の目標は達成。複数の展覧会を同時に開催し集客に結びつけている。
- ほぼ43万人前後で安定していることを評価する。これ以上の来館者数を求めることを目標にすべき段階は終わったように思う。

- 目標値をおよそ5万人上回ったという点ですでに評価に値するが、その内訳においても、収蔵展、自主企画展ともに、それぞれ大きく目標を上回っていることが高く評価できる。
- 開館以来の「予算額と年間観覧者数」からは、開館当初と現在を比べた場合、半分の予算で2倍の来館者を迎えていることが明らかで、この点も高く評価できる。
- 入館者数 42.7 万人は年度末になって突発した東日本大震災の影響を受けた結果、前年度比で僅かに減少したものであるが、全体としては、所期の目標を達成したものと判断できる。平成 19 年度の激減の後遺症からは完全に脱却したので、今後震災のダメージを克服して、さらなる展開を期待したい。
- 目標は超えたが、年度末に大震災がありそのわずかな期間の目減り分が多少の頭打ちにつながっていることは事実であり、目標は達成されたと言っていい。
- 平成 19 年度だけ来館者数が非常に低いのが、工事の関係と国のメディア芸術祭が、当館から六本木に移ったことの影響もあったとのことであり、その翌年から来館者数が回復している。恵比寿映像祭が立ち上がって、それなりの努力した結果だと思う。

《指摘された課題・提言等》

- 目標値が妥当であったか否か。美術館内部でよく検証してほしい。

(2) 質的な満足を得られる機会の提供 【評点5】

《評価の理由》

- ヌード、ポートレート、スナップショットなどのコンセプトで、収蔵展と企画展を連続させていたのが印象に残った。また、オノデラ、森村、古屋、ランス等の個展も、強い印象を受けた。
- 昭和の写真展は、これまでたくさんあり、新鮮味に欠けるときもあったが、「おんな」はまた別の視点から興味深く面白かった。
- ラヴズ・ボディは、もうゲイやジェンダーは終わったようにいわれる昨今、堂々とこのテーマで開催して一定の評価を得させてしまったのが立派。
- 恵比寿映像祭についても、これまではこちらが映像慣れしていなかったこともあり、全体として感じることはできなかったが、今回は本当に面白く評価する。
- 斬新的なものがたくさんあり、さすが写真美術館だと感じた。
- コレクションを活用した展覧会が、丁寧な調査を基に構成されており、平凡なコレクション展に終わらない工夫がみられる。
- 森村泰昌展や「芸術写真の精華」など記憶に残る企画展があった一方、疑問の残るものもあった。例えば「ニュー・スナップショット」展では、スナップとは思えない作品が選ばれていたことはまだ解釈の余地があるにせよ、没後5年

以上たった写真家を「新進作家展」に選ぶのは、来館者に対して誠実さが欠けるのではないか。

- 第三回恵比寿映像祭は、アニメに力を入れた点は理解できるが、展示は魅力に欠けた。
- 当該年度の展覧会のラインナップは、草創期から現代まで、写真の歴史を振り返ることができるバランスのよいものであったと思う。一般的な美術館での写真展では到底このようなことは実現できず、写真美術館の特性を最大限に生かしている。こうしたきめ細かい企画展の組み合わせが、リピーターを生み出し、写真の鑑賞者・理解者を増やし、写真文化を高めることへと繋がるだろう。そうであれば、古い写真と最先端の写真をつなぐ企画、あるいは講演やレクチャーといった仕掛けづくりが開発されるべきではないか。
- 「芸術写真の精華」展は、展覧会それ自体に両者をつなぐ大きな可能性を感じた。単なる古い時代の写真表現の紹介ではなく、写真表現とは何かを現代人に問いかける有意義なものであった。
- 「写真開拓史」展は、全国に及んだ調査研究に裏付けられている点を高く評価したい。
- 自主企画展「森村泰昌：なにものかへのレクイエム」が、社会的にも大きな反響を呼んだ。森村氏の年来の個性的な活動が集大成され、映像作品をふくむ新領域への展開を予兆するものとしても、大いに議論が沸騰した。平成22年度の写真界の重要なスポットを提供したという意味で、美術館の貢献を高く評価する。

《指摘された課題・提言等》

- 今後の恵比寿映像祭について、毎年同じディレクターが企画するのは現実的に無理がある。他の学芸員、外部から企画者を招くことも考えられるのではないか。どこまでの権限を持たせるのかも含めて外部にゲストディレクター、客員ディレクターという可能性も今後考えてもいいのではないか。

(3) 良質な映画の誘致と上映 【評点3】

《評価の理由》

- 昨年度映像ホールに行くことがなかったが、ホールの企画の統一的なイメージが持てないことが、足が向かない原因のひとつのような気がする。
- 希少映画か、アート作家の映画か、ポリティカルな映画かなど、何らかの方針があれば存在感が増すのではないか。ガーデンシネマがなくなってしまったのを機会に、再考の余地があるかもしれない。
- 写真美術館での映画上映は、メッセージ性があり興味が湧いてくる。
- 大資本のシネマ・コンプレックスに押され、良質の映画を上映する小さな映画

館の経営が難しい中、東京都写真美術館の映画上映の意義は大きい。

- 上映内容のバランスの工夫も見られるが、もう少し写真美術館の映画館としての特徴を出してもいいのではないか。
- 興味深い作品が上映されていると思われるが、館付属の上映館というより、ここだけ独立した活動をしているように見える
- 当該年度の上映映画はバラエティに富み、入場者も増加しており評価できる。映画を当館の活動の柱にして行くのであれば、映画を専門とする学芸員の配置を考えてもよいのではないか。
- 点数の多さなど本年度も工夫が見られる。また作品についても、資料性と娯楽性の両方に配慮したラインナップを組むなど、努力を評価したい。
- 全体としてのコンセプトが十分にこなしきれず、断片的であり、改善の余地は少なくない。恵比寿映像祭は、定着をつづけ、観客からの評価も受けるようになっていたので、これを突破口として今後の展開を考えることができるのではないか。

《指摘された課題・提言等》

- 「実験劇場」という看板、「アート&ヒューマン」というテーマがわかりにくく、何でもみんな括られてしまうのではないか。映画を専門とする学芸員の配置を考えてもいいのではないか。新しい機軸も含めた改革、改良策というのは何かないものか。
- 美術館本体との活動との関係が見えにくい、逆に独立部門と割り切る判断があってもいいのではないか。

3 教育・普及事業の評価 【評点4】

＜写真・映像文化の普及と新たな創造を支援する美術館＞

(1) 対象者に応じて多様なプログラムの提供 【評点4】

《評価の理由》

- 展覧会、ワークショップ、講演、トークなど現状でも多様なプログラムが行なわれているが、ワークショップにおいては、対象が子供や親であっても現代写真の地平が見通せるようなレベルが望ましい。そのためには担当者が常に「判りやすさ、面白さ」と「映像の芸術性、思想性」との間を行き来していることが必要。大学生以上の対象相手には、とにかく現場を見せてほしい。
- このような事業は、大変な尽力が必要。そこに写真美術館の願いとかがあって高く評価できる。
- 映像祭での教育普及事業も10日間の短い会期内での充実した内容で、無料観覧

との相乗効果により多くの新規来館者も誘致できたのではないか。

- スクールプログラムの内容は、ほとんどが鑑賞かフォトグラムで、内容が定型化して「調査・研究成果を活かす」という目標には叶っていないのではないか。それほど高望みをする必要はないが、目標自体の設定を考え直す道もある。
- 多種多様なプログラムが、多種多様なまま開かれている印象を受ける。
- 写真をつくる、写真を見る、写真を考えるというような親しみ易い括りで整理できないか。一方で、専門家向けのワークショップを、質を落とさずに開催することも当館の重要な使命である。
- 小中学校生徒への教育・普及は、学校側も強い関心を寄せるようになっており、また、デジカメの一般化によって子どもたちの写真製作機会も増えている。このことから、普及活動への参加者も増加しているように見える。それとともに、写真の鑑賞についてのオーソドックスな教育も必須。これは、美術教育一般にも通用するが、実作教育に過度に偏重した結果、鑑賞は単なる「受動」だとして軽視されたためかと思われるが、考え直してほしい。

《指摘された課題・提言等》

- がんばっていると思うが、もう少し体制として力点を置いてほしい。
- 当館は展覧会数が多く、かつ普及活動も多様なため、教育・普及活動の優先順位を、何を基準にどうつけるかが問われる。

(2) 図書・情報の収集と公開の促進 【評点4】

《評価の理由》

- 得難い図書、情報の収集であり、公開もきちんとされているが、人員、設備等で「充分」ということはあり得ない。
- 担当者の意図が実現できる設備、人員のいっそうの充実が望まれる。何でもネットで調べられる時代だからこそ、担当者との接触を通じて知識を得たいと思う利用者も増えてくると思うし、利用者のレベルも高くなっていると思われるので、時々見かける美術館資料室の「ありきたりの図書・資料、短い公開時間」の眠ったような雰囲気におちいらないようにしてほしい。
- 去年に続き図書室も独自のやりかたで公開しているところは評価できる。大切な資料をおしげもなく提供することこそ開かれた図書館だと思う。また、ネットの蔵書検索はうれしい限りである。
- 写真専門館の図書館として、的確な情報提供、サービス向上に努めている。
- コピー代については、デフレ時代でもあり、値下げについて引き続き検討していただきたい。
- 写真関連の専門図書館として、高い質を維持しており、より広い広報活動に当たってほしい。

《指摘された課題・提言等》

- 昨年も課題としたコピー経費が1枚30円は高すぎる。公立図書館は10円のところが多い。一般の生活の中にあるものと比較し、例えばコンビニで10円なのに何で30円だろうとか思われる。当面変えにくいかもしれないが、よそではもう少しサービスしているので引き続き検討を願う。
- 図書室の運営は、明らかに当館のユニークな活動のひとつである。今後の発展が期待できる領域であるから、収蔵スペースのさらなる確保を真剣に検討していただきたい。

4 広報事業・情報発信の評価 【評点4】 ＜写真・映像文化の拠点として貢献する美術館＞

(1) 効果的な広報・宣伝 【評点4】

《評価の理由》

- ポスター、ちらし、パンフレットはとても重要な広報アイテム。写真美術館オリジナルのものの発掘やなんでもやってみる精神は評価できる。
- 若者をターゲットとしたニアイズの発行など、工夫がみられる。他館と比べると広報活動については積極的。
- 従来の質の高い広報活動に、広報職員が一人増員されたことで、さらなる質の向上が期待される。
- 熱心さの現れと理解するが、プレスツアーはあまり長くない方が望ましい。
- 昨年同様、記者懇談会やギャラリートツアーなどプレスへの対応はきめ細かく、相応の効果을 上げている。今後も継続すべきである。
- 美術館等多くの施設が、有効な広報・発信のあり方について悩みつつ、新規の事業にも取り組んでおり、写美だけに有用な方式というものを発案することは難しい。ただ、さまざまな手法がどれだけの有効性を発揮しているか検証する作業は必要。そのなかから適切なヒントを捜しだすことで打開できるのではないか。
- eyes に加えて、nya-eyes の創刊があり、一段と刊行物が充実してきている。
- ニアイズを読んだが、書いた漫画家の方はあんまり肯定的じゃないという感じがする。写真美術館に対してちょっと皮肉っぽく、プラスの印象を受けなかった。かえって辛口のほうがいいのかなと思う。

《指摘された課題・提言等》

- eyes に加えて、nya-eyes の創刊があり、一段と刊行物が充実。せっかくだ

ったものが無駄にならないように、どのように普及し、誰に届いているのかを調査し、配布先を精査すべき。

(2) インターネット等を用いた情報発信の推進 【評点4】

《評価の理由》

- HP は実際的な情報は現状で十分だが、美術館によってはセンスの良い動画や洗練された音楽で、HP にアクセスしたとたんに別世界に入ったような気分させるものもある。写美には映像部門もあるのだから、そうした期待感もあるのではないか。
- HP も工夫されており、使いやすい。
- ウェブが大変充実してきた。アーカイブの機能をもたらそうという姿勢に好感を抱く。過去の刊行物の大半が pdf で読むことができる点も評価する。
- ただし、年報のバックナンバーは掲載されているが、研究紀要のバックナンバーがない。また、紀要の掲載は「活動報告」とするのではなく、むしろ「研究」という項目を別に立て、当館の学芸員による研究成果を発信することを勧める。
- ミュージアムのネット発信としては、図書情報など広い範囲に適切に拡がっており、評価が高い。今後のますますの展開が要望される。
- ブログ「みっちゃんの日本写真開拓日記」は、読んでなかなか楽しいが、いつも同じ人の文章ばかりが、1カ月に一度更新される程度で、まだ個人の趣味の範囲内に留まっている。

《指摘された課題・提言等》

- ウェブでは判りやすい情報発信に努めているが、海外への発信にも力を入れてほしい。
- 英語版では日本語情報のままの掲載も散見されるので、改善が必要。専任の情報担当者の配置は必須ではないか。
- 「おかげさまで15周年」の頁の「開館の経緯」に一次資料を提示すべき。誰がどのような方針で何を決定したのかがわかるとよい。写真美術館の開館それ自体が歴史的な出来事として記録されてよいのではないか。

5 来館者の視点、企業・団体の参加、ボランティア事業、地域連携の評価 〈開かれた美術館〉 【評点4】

(1) 良質なサービスの企画・提供 【評点4】

《評価の理由》

- 昨年、ショップやカフェや2階の休憩所に比べ、エントランスがごたごたしていると指摘したが、何ら変わっていない。
- 全体的に本当に工夫しており、実績や自信が誇りにつながっていい結果に結びついてると思う。
- 友の会の更新方法や特典の改善、またアンケートの要望への対応など、昨年からの改善への努力がみられる。
- 人的なサービスはよいが、1階ロビー、階段、エレベーターから降りて展示室へと向かう空間デザインがあまり快適とはいえないため、よい印象を抱きにくい。平成25年度の大規模改修に向けて、デザイン面での改善を十分な時間をかけて検討してほしい。
- ミュージアムショップの品揃えやお客様の入れこみが良好で、ここでのショッピングが写真美訪問の楽しみのひとつとなっており、さらなる充実を期待したい。
- カフェのほうは、どこことなく寸詰まりな感じでくつろげないように思われる。すでに廃止になった2Fカフェのほう心地よかった

《指摘された課題・提言等》

- 美術館によっては、グッズ販売に偏っているケースもあるが、写真文化の中心としての期待の高い写真美術館では、写真に関する資料や書籍の充実に一層取り組まれない。「写真のことなら、あのショップに」という存在になってほしい。

(2) 企業・団体等の参加促進 【評点5】

《評価の理由》

- この不景気な時代に、さまざまな企業、学校、団体の支援会員が増えているとのこと、大変結構。支援会員に写真関連、印刷関連等、写美の性格と関連深い企業・団体があるのが心強い。
- 日大藝術学部の協力機関としての位置づけなど、特異な方法が成果を上げていることも評価できる。
- 支援会員制度はその企業自体にも好感が持てる。
- 芸術分野にもきちんと理解があるというステータスが感じられて、これからもそのようにしてほしいと思う。

- 写真美術館は、企業・団体からの支援会員制度の普及が突出しているといえる。
- 公立美術館の中では、数少ない成功例として他館の見本となるような活動ぶりである。
- こうした経済状況下でも、支援会員数、会費総額ともに増えているのは、素晴らしい。
- 支援会員数がさらに増え、十分な成果を上げていると評価できるし、会員に対するケアも適切十分である。
- きわめて高い水準にあり、今後もこの方向で活動していただきたい。

《指摘された課題・提言等》

- 特になし

(3) ボランティアの参画促進 【評点4】

《評価の理由》

- ボランティア制度はとても重要なこと。多くの方々の意見に耳を傾けて積極的に取り組んでいる。
- ボランティア活動を取り入れ着実に実績を積んでいる。
- ボランティアの活動が、月によってかなり増減がある。それなりの理由があるにしても、できるだけ安定したペースで成果を求めていくのも必要。
- 全体として、ボランティア対応のポリシーについて、再考の余地があるかもしれない。

《指摘された課題・提言等》

- 人数が多ければよいというものではない。登録者65名が適正か否かは、活動内容から判断されるべきだろう。その場合に、個人的な特技や資質が有効に生かされているかどうか重要であり、ボランティアの満足度調査や意識調査を実施したらどうか。

(4) 地域との連携強化 【評点4】

《評価の理由》

- 地域との連携を頭にいれて活動するという事は自らをも活性化させる動きがあると思う。
- オープンな協力、連携は重要と思う。
- 地域との連携は、公立美術館の昨今の使命だが、「あ・ら・かるチャー」の活動が、どの程度、連携の効果に結びついたのかは見えにくい。

- 地域といっても、ガーデンプレイスはもともと人工的な街。お付き合い的に地域と連携するぐらいなら、美術館活動本体の強化を願う。
- ここでいう「地域」をどうとらえるのかをまず館内で十分に協議し、戦略を立てるべき。大きく分けて、恵比寿という商業地域と、住民や学校を主体とした生活地域があるはず。前者は「Welcome!恵比寿」がそれに当たるだろうが、十分な成果を上げたか疑問。後者については、恵比寿を超えてどの範囲を想定するかによって活動が変わる。
- 「地域との連携」とは、写真美術館の活動を「地域的な限定のなかにとどめる」という意味ではなく、施設そのものが地域社会に責任を負う存在であるという意味。写真美術館は全国区の機関であるが、その存在は地域によって規定されている。
- 「あ・ら・かるチャー」の活動など地域性に関わる側面には、面倒がらずに積極的に参画していただきたい。

《指摘された課題・提言等》

- 今後、パブリックスペースは災害時にどのような貢献をするかが注目されている。ガーデンプレイスの他の企業、機関と連携してそれについて考えておくべき。

6. インフラの改善

【評点3】

＜ミッション達成のための必要な基盤の整備＞

《評価の理由》

- 工事予定リストを見ると、かなりつつましい内容に思われる。3年後の大規模改修工事まで、これで充分なのだろうか。館で働く人、観衆、収集作品の安全を常に追求していただきたい。
- 設備の維持は大変だと思うが、しっかり維持してる。
- 職員の健康管理にもきちんと取り組んでいる。
- 写真美術館への来館者数が伸びていることなど、館の専門性と普及の両立に工夫がみられ、写真美術館としてのステータスを上げる努力を評価したい。
- 今後は更に、専門性を発揮できる後進の育成を可能とする環境の整備、サービス向上のための適切な人配を実施できるよう、内部の理解と整備を期待したい。
- 開館20周年に向けて大規模改修が予定されているので、建物のハード面での使いにくさが改善されることも併せて期待する。館全体のハードの雰囲気をもう少し21世紀型に近づけたい。
- 昨年記述した要望に引き続き取り組んでいただきたい。

- 修理に追われている感もあるが、限られた予算の中で、適正に優先順位をつけ、順調に行われている。

《指摘された課題・提言等》

- 設立後 15 年が経過し、この間に恵比寿地区のお客の全体的な移動の動線にも変化が生じたように見える。その結果、2F 南口玄関は、正面ではあっても、やや閑散としている。カフェも廃止された。せつかくかなりのスペースがこれに付随しているので、それを有効に利用し、さらに館内の配置・構成についても再検討の要がある。
- 1F エントランスの構造について批判があることから、大規模な改修とシンクロさせることも含めて、空間インフラの再定義を行う作業にとりかかりたい。